



館長だより

山形県産業科学館

令和6年4月26日(金)

発行 館長 加藤 智一

合唱との出会い①

退職にともなって、いらなくなった本とか資料とかを整理し始めてはいるのだけれど、なかなか前に進まない。それもそのはず、一度手に取ると、様々なことが思い出されて、ついつい見入ってしまい、なおさら前に進まない。そんなときに出会ってしまったのが、10年前、息子が通っていた大学の後援会報（会報といっても308ページもある立派なやつ）の寄稿文。読み返したら、結構真面目に良い事書いているではないか。そこで今回はこの寄稿文をそのまま紹介させていただきます。今日はその第一回。

農大法 137 第57巻 第2号 平成26年1月

(東京農業大学教育後援会) p120~p122 より

第1回 「出会い」

もうかれこれ20年前になる。雪深い米沢で高校の教員をしていた私は、ある年の忘年会で、料亭の仲居さんとの会話の中で、以前から興味があったアカペラの宗教曲の話をしたのだと思う。「いい鴨見つけた」と思ったかどうか知らないが、数日後この仲居さんの知り合いであった某高校の音楽教師から自宅に電話があり、早速、米沢男声合唱団に入団することになった。元々合唱は嫌いでなかったし、中学校時代は、Nコンにも出場したことがある。ただ、この時の結果は散々で、運動部を引退した3年生の男子を数人集めて、急揃えの混声合唱であったために、1年生から頑張ってきた当時の部長（女子）や顧問の先生には悔しい思いをさせてしまったと責任を感じている。こんな切ない思い出も後押ししてか、今ではすっかり合唱浸けの毎日。コール・マイゼン（男声合唱）、米沢混声合唱団、東音会合唱団と3つを掛け持ちしているので、定期演奏会は年2~3回。その他に市民音楽会やクリスマスコンサート、周辺地域の合唱団への友情出演なども合わせると、年5~6回はステージに立っている。もちろん、そのための練習があるわけだから、土日はもちろん、平日も遅くなる日が多い。

だからといって決して仕事が疎かになっているわけではない。むしろ逆である。現在の教育界では、教師のメンタルヘルスケアが話題となっている。心の病で休職や退職に追い込まれる教員は毎年右肩上がり。そしてこのことは、学校経営上の問題に留まらず指導する生徒にも影響を与えかねない深刻な問

題なのである。メンタルヘルスの第一歩は、自分を知ること。そして上手にエネルギーを発散すること。幸いなことに私は、仕事上のどんな辛い出来事も、合唱団活動を間に挟むことで、抱え込むことなく、臨機応変に乗り越えることができた。また、合唱団で培った人脈も、時に大いに力を貸してくれた。普通の社会人生活では、とうてい話す機会などあり得ない異業種集団、元校長他教育関係者、社長、会社役員、団体職員、医師、看護師、民生委員、町内会役員、酪農家他農業従事者にフリーター、そして学生という具合に、合唱というキーワードで繋がり、時に合宿や強化練習会、懇親会で、性別も年の差も社会的立場も超えて、盃を交わしながら語り合う中で学ぶことは実に多彩で、教員として培ってきた常識や概念はあつとと言う間に崩壊してしまう。そう言う意味では、私にとって合唱団活動は、多様な社会との接点であり、価値観を見直す重要な場所なのである。

館長の独り言

年寄りな怒りっぽい はて？

身内の話で恐縮ですが、私の母を見ているからだろうか、そんな思いを感じるようになった。

今思えば、大概にして私がよくないのだが、「年なんだからできなくて当たり前だ」とか「年なんだからおとなしくテレビでも見て」とか無意識に言っていないか。「年なんだから」と言うフレーズが、存在を否定されているようで、かといって上手くできない自分もいるので、イライラして怒りっぽくなっているのだと思う。

自分を認めて欲しい。共感して欲しい。というのは人間として基本的な欲求なのだと思う。

デーブル・カーネギーは、著書の中で、「あなたが明日出会う人々の4分の3は、自分と同じ意見の者はいないかと必死になって探している。この望みを叶えてやるのが、人々に好かれる秘訣である。」とのべていますが、本当にそうですね。共感します。